腭癌の扁桃・舌根部転移例

河合 晃充・折田 洋造・山本 英一
秋定 健・山川 純至・吉弘 剛
林 琢巳

Metastasis from Pancreatic Carcinoma to Palatine and Lingual Tonsils ; A Case Report

Akimitsu Kawai, Yozo Orita, Hidekazu Yamamoto,
Takeshi Akisada, Junshi Yamakawa, Tsuyoshi Yoshihiro
and Takumi Hayashi
(Kawasaki Medical School)

Metastatic tumors to the head and neck from distant primary tumors are rare. Very few cases of metastatic tonsillar tumor have been reported in the literature, and most of them originated in the lung, kidney, skin, or stomach. We treated a patient with pancreatic cancer which had metastasized to the palatine and lingual tonsils. A 57-year-old male complained of sore throat and a feeling of foreign body in the pharynx after treatment for a lung tumor. The right palatine and lingual tonsils were coated with a dirty furlike covering. Biopsy showed an undifferentiated carcinoma. The tumor disappeared completely after radiation treatment, but he developed liver damage and obstructive jaundice caused by para-aortic lymph node swelling. Jaundice disappeared after PTCD (percutaneous transhepatic cholangio drainage) and radiation to the abdomen, but he died 2 months later of peritonitis carcinomatosa. Autopsy revealed primary pancreatic undifferentiated carcinoma which had metastasized to the lung and tonsils.

As far as we are aware, this is the first report in Japan of metastasis to the tonsils from a primary pancreatic tumor. The clinical aspects of metastatic tonsillar tumor and a possible mechanism of the metastatic processes are discussed.

Key words: tonsillar metastasis, pancreatic cancer, undifferentiated carcinoma

はじめに

耳鼻咽喉科領域への他臓器の悪性腫瘍からの転移は頸部リンパ節を除けば、頻度は稀である。また、その内容を検討すると、転移部位は鼻・副鼻腔が最も多く、原発部位は腎臓が最も高頻

度である^{1)~3)}。口蓋扁桃への転移となると、さらに稀で、本邦では原発部位としては肺⁴⁾⁵⁾、胃⁶⁾⁷⁾、肝臓⁸⁾、腎臓⁹⁾、廻盲部¹⁰⁾、胆嚢¹¹⁾、皮膚悪性黒色腫¹²⁾などが報告されている。今回我々は、腭臓が原発巣であった転移性口蓋扁桃・

舌根扁桃腫瘍の症例を経験したので, 若干の文献的考察を加えて報告する.

症 例

患者: 57歳, 男性.

既往歴: 47歳時, 十二指腸潰瘍にて 2/3 胃切術.

家族歴: 特記すべきことなし.

現病歴: 1991年 4 月, 健診の胸部レントゲン検査にて右肺門部に異常陰影を指摘され, 肺癌の診断にて当院呼吸器内科に入院. 喀痰検査, 気管支鏡検査などの精査を受けるも, 組織型は確定できなかった. 右肺門部の腫瘍に対して carboplatin 400 mg, mitomycin C 10 mg, etoposide 10 mg, methylprednisolone 25 mg の化学療法を施行されるも効果はみられず, 肺門部のリンパ節腫脹による右気管支の圧迫により無気肺をきたしたため, 放射線治療を開始した. 計 60 Gy の放射線治療により腫瘍は著明に縮小し, 無気肺も改善した. また, 全身精査にて脳転移と右大腿骨転移を認めたため, 頭部にも放射線治療を開始し, 計 44 Gy の放射線治療にて脳転移は消失した. 右大腿骨の転移には自覚症状もないため経過観察とされた. 他の全身各部には転移は確認し得なかった. 7 月 29 日一旦退院となったが, 8 月中旬頃より咽頭痛, 咽頭不快感が出現し, 右扁桃に腫瘍を認めたため, 8 月 12 日当科を紹介され受診した. 右口蓋扁桃, 舌根部に腫瘍を認めたため, 同部位を生検したと

ころ, ともに, かなり低分化な腺癌と診断され, 8 月 26 日当科に入院となった.

入院時現症: 右口蓋扁桃および舌根部右側に表面に白苔を伴う腫瘍を認め(図 1), 右上深頸部に 1×1 cm 大の腫瘍を触知した. 胸部には異常所見は認められなかったが, 腹部触診上, 胸骨正中線上にて肝臓を 1 横指触知した. 圧痛はなく, 脾臓は触知しなかった. 軽度の貧血を認めたが, 黄疸はなかった.

検査所見: 表 1

経過: 口蓋扁桃, 舌根部の腫瘍の生検組織像(図 2)ではともに異型性の強い, 核小体の明らかな核を有した腫瘍細胞が一部腺管様に増殖し

表 1 検査所見

RBC $343 \times 10^4/\text{mm}^3$, Hb 10.4 g/dl
Ht 30.6%, PLT $34.5 \times 10^4/\text{mm}^3$
WBC $12200/\text{mm}^3$ (N.b 8, N.s 76, Ly 8)
Bil (T) 0.4 mg/dl, Bil (D) 75%, I I 3
ALP 97 I.U./l, Cho 195 mg/dl,
γ -GTP 57 I.U./l, LDH 246 I.U./l
TP 6.7 g/dl, Alb 3.0 g/dl, Glb 3.7 g/dl
BS 117 mg/dl, ChE 135 I.U./dl
GPT 20 I.U./l, GOT 23 I.U./l
Crn 0.9 mg/dl, BUN 11 mg/dl, UrA 4.0 mg/dl
Amy 248 I.U./l
ESR 101/135 mm, CRP 25.8 mg/dl
Na 143 mEq/l, Cl 3.9 mEq/l, K 105 mEq/l
P 1.8 mEq/l, Ca 4.5 mEq/l, Mg 2.0 mEq/l

図 1 口腔内所見

図 2 扁桃腫瘍生検組織像 (HE 染色 ×400)

ており、低分化な腺癌と診断された。そこで、組織型不明であった肺癌が腺癌であり、これが口蓋扁桃、舌根部扁桃に転移したものと考えた。

入院後も口腔内の腫瘍は急速に増大し、一部自壊を認めるようになったため、治療として、当院呼吸器内科での病歴より、肺腫瘍や脳転移に対し非常に有効であった放射線治療を選択した。以後、腫瘍は著明に縮小し、計40 Gy照射したところ腫瘍は完全に消失した。しかし、放射線照射中より徐々に肝障害が出現しはじめ、内服していたTegafurの影響と考え、内服の中断と肝底護剤の投与にて一旦は軽快したが、放射線治療終了後、再び肝障害が出現し、徐々に黄疸が出現しはじめた。腹部超音波検査にて腹部リンパ節の腫脹とそれに伴う閉塞性黄疸と診断され、内科転科となった。

内科にて腹腔神経叢ブロックによる鎮痛とPTCD (percutaneous transhepatic cholangio drainage) による減黄をはかったのち、腹部リンパ節に対し、放射線治療を計28 Gy行ったところ、閉塞性黄疸は改善したが、腹部CT上、腹腔内に多数の腫瘍を認め、癌性腹膜炎にて12月7日死亡した。

剖検所見(表2): 剖検を行なったところ、肺実質には腫瘍は存在せず、腫瘍が存在したと思われる部位もみられなかった。両側肺門リンパ

節は腫大し、転移を認めた。また、口腔内には腫瘍は認めず、頸部リンパ節にも転移はみられなかった。腹部において、脾臓頭部から体部にかけて10×17×7 cm大の腫瘍が存在し、周囲に圧排された脾臓実質を認めた(図3)。この脾臓の腫瘍は組織上、口蓋扁桃や舌根部扁桃の腫瘍と酷似した組織で(図4)、最終的に未分化癌と診断された。また、腹腔内では脾臓周囲、胆管周囲、肝門部、腸間膜のリンパ節や肝実質、腹膜全体に転移を認め、血性腹水4300 mlを認めた。

以上の剖検結果より、脾臓原発の未分化癌であり、口蓋扁桃、舌根部扁桃への転移と診断された。

考 察

他臓器癌の耳鼻咽喉科領域への転移は比較的に稀であり、特に口蓋扁桃への転移は極めて少な

図3 脾臓腫瘍肉眼像

図4 脾臓腫瘍組織像(HE染色 ×400)

表2 剖検所見

主病変: 脾臓癌(未分化, 多形細胞型)

転 移: 臓器(肝, 腹膜)

リンパ節(脾臓周囲, 胆管周囲,
肝門部, 両肺門部, 腸間膜)

副病変: 1) 黄疸

2) 血性腹水 4300 ml

3) 誤嚥性肺炎

4) 両側肺尖部ブラ

5) 急性胆嚢炎, 胆管炎

6) ヘルペスウイルス感染症
(食道, 気管)

7) 胃切除後状態

8) 脂肪髄(放射線治療後状態)

い. 1985年の周ら⁵⁾によると国内外で72例の報告があるとしており, うち国内では8例の報告があったと報告している. 以後も何例かの報告^{11)13)~26)}があり, 我々が検索し得た範囲では, 今回の我々の報告も含め口蓋扁桃への転移は本邦では表3のように27例を数えるにすぎない. 以後, 若干の考察を加える.

1) 原発部位・頻度

原発部位に関しては, 本邦では肺が悪性中皮腫の1例を加えると7例と最多であり, 続いて胃癌が5例みられた. しかし, 国内外をまとめ

ると肺癌と腎細胞癌が最も多く, 皮膚悪性黒色腫・胃癌・乳癌が続く(表4). 本症例のような腭原発腫瘍の扁桃転移の例はFeleppaら²⁷⁾とMaorら²⁸⁾の報告があるのみで, 本症例が本邦では初めてである. 一方, 本邦における腭臓癌の頭頸部領域への転移の報告は, 下顎骨²⁹⁾への転移や歯肉³⁰⁾³¹⁾への転移など口腔外科領域に散見されるが, 耳鼻咽喉科領域においては喉頭蓋への転移が1例報告³²⁾されているのみである.

本邦において海外に比べ胃癌の比率が高いの

表3 本邦における転移性扁桃腫瘍報告例

No.	報告年度	報告者	年齢	性	転移部位	原発腫瘍	治療	予後
1	1956	斉藤ら ⁴⁾	69	男	両口蓋扁桃	肺 癌	な し	死亡
2	1961	猪ら ¹⁰⁾	66	女	左口蓋扁桃	廻盲部肉腫	左扁桃摘出術	死亡
3	1964	金子ら ⁶⁾	65	女	両口蓋扁桃	胃 癌	な し	死亡
4	1981	船井ら ⁸⁾	33	男	左口蓋扁桃	肝 癌	左扁桃摘出術	死亡
5	1981	田中ら ⁷⁾	67	男	左口蓋扁桃	胃 癌	な し	死亡
6	1982	寺尾ら ¹²⁾	51	女	右口蓋扁桃	悪性黒色腫	化学療法+OK-432局注	死亡
7	1983	三井ら ⁹⁾	63	女	右口蓋扁桃 舌扁桃	腎 癌	な し	死亡
8	1983	三井ら ⁹⁾	24	女	右口蓋扁桃	子宮絨毛癌	化学療法+放射線治療	生存
9	1983	宮原ら ²⁾	47	男	左扁桃	肺 癌	放射線治療	死亡
10	1985	周ら ⁵⁾	57	男	右口蓋扁桃	肺 癌	化学療法	死亡
11	1985	周ら ⁵⁾	34	女	左口蓋扁桃	異所性絨毛癌	左扁桃摘出+化学療法	生存
12	1985	梅田ら ¹³⁾	45	女	右口蓋扁桃	腎 癌	扁桃摘出術	生存
13	1987	森ら ¹⁴⁾	51	男	左口蓋扁桃	肺 癌	化学療法	死亡
14	1988	浅見ら ¹¹⁾	67	女	右口蓋扁桃	胆嚢癌	根治的切除・頸部郭清+再建術	生存
15	1988	青山ら ¹⁵⁾	76	女	右扁桃	廻盲部癌	化学療法	死亡
16	1988	平間ら ¹⁶⁾	78	男	右扁桃	胃 癌	不 明	不明
17	1989	持松ら ¹⁷⁾	77	女	口蓋扁桃	甲状腺癌	不 明	死亡
18	1989	大塚ら ¹⁸⁾	42	男	右口蓋扁桃	悪性黒色腫	右扁桃摘出術	死亡
19	1990	後藤ら ¹⁹⁾	50	男	左口蓋扁桃	肺 癌	放射線治療+化学・免疫療法	死亡
20	1990	青柳ら ²⁰⁾	52	女	舌扁桃	子宮癌	不 明	不明
21	1990	門脇ら ²¹⁾	48	男	両口蓋扁桃	胃 癌	両扁桃摘出術	死亡
22	1990	斉藤ら ²²⁾	33	男	口蓋扁桃	肝 癌	腫瘍摘出術	死亡
23	1990	三武ら ²³⁾	81	男	右口蓋扁桃	胃 癌	不 明	死亡
24	1990	森ら ²⁴⁾	27	女	右口蓋扁桃	乳 癌	化学療法	生存
25	1992	永井ら ²⁵⁾	67	男	両扁桃	肺 癌	化学療法	死亡
26	1992	坂下ら ²⁶⁾	63	男	右扁桃	肺悪性中皮腫	右扁桃摘出+頸部郭清術	生存
27	1993	自験例	57	男	右口蓋扁桃 舌根部扁桃	腭 癌	放射線治療	死亡

は、本邦では胃癌の絶対数が多く、そのため相対的に頻度が高くなったものと思われる。したがって、肺癌、大腸癌、乳癌など、最近増加傾向のある腫瘍からの口蓋扁桃を含めた頭頸部領域への転移が、今後増加してくることが予想される。また、医療技術の進歩により原発巣のコントロールが可能となり、生命予後が延びることにより、新たな転移巣が出現してくることも考えられ、そのため近年、転移性扁桃腫瘍の報告が他科からの報告も含め増加傾向にあるようである。一方、現在までの報告例では必ずしも剖検が施行されておらず、本症例においても剖検が行なわれるまで脾臓が原発であることを確認し得なかったこともあり、転移性扁桃腫瘍を認めた場合、種々の原発巣の可能性を考慮し、より詳細な全身検索が必要であると思われる。

2) 転移様式

転移経路に関しては、血行性転移とリンパ行

性転移の両者が考えられるが、船井ら⁸⁾が推定しているように、扁桃は免疫機能を有し、腫瘍排除能力をもっていると思われること、また、解剖学的に扁桃には輸入リンパ管が存在しないことより、リンパ行性転移ではなく、血行性転移が多いと予想される。しかし、金子ら⁶⁾は、輸入リンパ管のある扁桃周囲のリンパ節へ転移したのち、扁桃へ直接浸潤する可能性もあると述べており、リンパ行性転移の可能性も示唆している。本症例では肺転移巣が先行しており、血行性転移であった可能性もおおいにあるが、頸部リンパ節転移と思われる頸部腫瘍の存在したこと、肺の転移巣が実質ではなく肺門リンパ節のみにみられたこと、脾臓周囲のリンパ節に著明な転移がみられたことや閉塞性黄疸や無気肺などが腫大したリンパ節によるもので、治療によりともに軽快していることなど、転移の存在部位やそれに伴う臨床症状がいずれもリンパ

表4 国内外における転移性扁桃腫瘍
(周 明仁, 他: 1985⁹⁾ より改変)

原 発 腫 瘍	症 例 数	
	総 計	本 邦
carcinoma of the lung	19	6
renal cell carcinoma	19	2
malignant melanoma of the skin	15	2
adenocarcinoma of the stomach	11	5
carcinoma of the breast	9	1
seminoma	6	0
choriocarcinoma	3	2
carcinoma of the pancreas	3	1
adenocarcinoma of the rectum	2	0
thyroid carcinoma	2	1
hepatoma	2	2
sarcoma of the intestines	2	1
adenocarcinoma of the gallbladder	2	1
synovial sarcoma of the knee	1	0
adenocarcinoma of the prostate	1	0
ovarian androblastoma	1	0
adenocarcinoma of the colon	1	1
carcinoma of the uterus	1	1
malignant mesothelioma of the pleura	1	1

節への転移を中心としていることより, リンパ行性転移の可能性も考えられる. また, 扁桃への転移巣が上極に限局していたり, 扁桃に有茎性に腫瘤を形成するように増大している例が何例か報告されていることから, 扁桃周囲のリンパ節への転移ののち, 扁桃へ浸潤する可能性もおおいにありうると思われる.

3) 治療と予後

治療としては, 癌の末期での扁桃転移である場合が多く, とくに治療がなされない場合もあるが, 原発巣に応じた化学療法がなされている場合も多い. 外科的治療としては, 原発巣のコントロールが良好な胆嚢癌の例¹¹⁾に対して積極的な手術が行なわれているものの, 他の例では, 対症的治療として扁桃摘出術が行なわれているに過ぎない. 船井ら⁸⁾や三井ら⁹⁾は, 疼痛, 出血, 嘔吐反射等のある症例に対しては扁桃摘は対症的に有効であると述べている. 本症例では, 先行した肺転移, 脳転移への治療として放射線治療が非常に有効であったことより, 放射線治療を選択し, 局所的には非常に有効であった. これは, 本症例が未分化癌であったことが関係していると思われる. 転移巣への治療はやはり, 原発巣に有効な化学療法や放射線治療と, 局所的外科的治療(扁桃摘を含め)などを患者の状態にあわせて組み合わせていくことになるであろう.

予後は, 口蓋扁桃への転移が存在するということは, 癌の末期であり, かなり予後不良で, 表3のように報告された例のほとんどが死亡している. 報告された時点では生存している例でも原発巣も含めた腫瘍のコントロールができていなければ, やはり不幸な転帰をとっているものと予想される. しかし, 予後不良が予想されるとはいえ, 転移性扁桃腫瘍を放置すると, 腫瘍の増大により, 早期に摂食困難となり, 死期を早めることになる. また, いずれ腫瘍の増大により, 気道確保のための気管切開を余儀なくされる. また, 腫瘍からの大出血の可能性もある. したがって, 予後の善し悪しに関係なく, 転移巣に対しても何らかの治療をするほうが良

いと思われる. 患者の quality of life を考慮したターミナルケアの一環として, 転移巣に対する治療を慎重に選択していかなければならないと考えられる.

ま と め

剖検の結果, 脾臓の未分化癌が原発であった非常に稀な転移性扁桃腫瘍を報告し, 転移性扁桃腫瘍の頻度, 転移様式, 治療, 予後に対して若干の文献的考察を行なった.

本論文の要旨は1992年日耳鼻第18回中国地方部会連合会にて発表した.

稿を終えるにあたり, 症例の診断, 治療にご協力, ご指導下さった川崎医科大学呼吸器内科玉田貞雄先生, 消化器 I 内科大元謙治先生, 病理学廣川満良先生に心から感謝いたします.

文 献

- 1) Bernstein JM, Montgomery WW and Balogh K : Metastatic tumors to the maxilla, nose and paranasal sinuses. *Laryngoscope* **76** : 621~650, 1966.
- 2) 宮原 裕, 馬場克則, 仙波 治, 他 : 頭頸部領域への転移癌. *日耳鼻* **86** : 951~957, 1983.
- 3) 乾 洋史, 菊岡政久, 藤田信哉, 他 : 腎細胞癌の上顎洞転移例. *耳鼻臨床* **85** : 69~75, 1992.
- 4) 斉藤英雄, 飯田信長, 山田勝彦, 他 : 両口蓋扁桃に転移を見た肺癌症例. *日気食会誌* **7** : 42~47, 1956.
- 5) 周 明仁, 村主好弘, 村上 泰, 他 : 転移性口蓋扁桃腫瘍の二症例. *日扁桃誌* **24** : 105~112, 1985.
- 6) 金子善一, 枋木照子, 中島利子 : 両側口蓋扁桃の原発悪性腫瘍を思わせた胃癌の1剖検例. *耳喉* **36** : 415~418, 1964.
- 7) 田中憲雄, 東家倫夫, 小柳義夫 : 胃癌よりの転移性口蓋扁桃腫瘍の1症例. *耳鼻* **27** : 811~814, 1981.
- 8) 船井洋光, 船坂宗太郎, 山口宏也, 他 : 転移性扁桃腫瘍の1例. *耳喉* **53** : 421~423, 1981.
- 9) 三井博文, 松浦聖一, 大沼秀行, 他 : 転移性口蓋扁桃腫瘍の2症例. *日扁桃誌* **22** : 173~176, 1983.
- 10) 猪 初男, 岡本 健, 阿部矯一, 他 : 廻盲部よ

- り転移せる口蓋扁桃肉腫の1例. 耳喉 33 : 77~81, 1961.
- 11) 浅見清孝, 横井 久, 石田和也, 他 : 胆嚢癌の扁桃転移症例. 耳鼻臨床 81 : 1755~1759, 1988.
- 12) 寺尾祐一, 浅井芳江, 濱田稔夫 : Acral Lentiginous Melanoma. 臨皮 36 : 171~176, 1982.
- 13) 梅田敬子, 馬場駿吉, 横田 明, 他 : 腎癌による口蓋扁桃転移癌の1例. 日扁桃誌 24 : 113~116, 1985.
- 14) 森 茂樹, 桜井一生, 畔柳久志, 他 : 肺癌による転移性口蓋扁桃腫瘍の一症例. 耳鼻臨床 80 : 1261~1265, 1987.
- 15) 青山仁志, 小沼政子, 三上勝也, 他 : 大腸癌よりの口蓋扁桃転移癌の一例. 日大腸肛門誌 41 : 630, 1988.
- 16) 平間敏晴, 田中淳夫, 長 幹磨, 他 : 扁桃転移で発見された胃癌の1例. Gastroenterological Endoscopy 30 : 2129, 1988.
- 17) 持松いずみ, 宮田佳代子, 高畑喜延, 他 : 他領域からの頭頸部転移症例. 耳鼻 35 : 197~201, 1989.
- 18) 大塚俊夫, 池内恒雄, 岩下明德, 他 : 扁桃に転移した悪性黒色腫の1例. 皮膚臨床 31 : 452~453, 1989.
- 19) 後藤達也, 村上匡孝, 中江 進 : 両側口蓋扁桃に転移をみた大細胞型肺癌症例. 耳喉頭頸 62 : 685~688, 1990.
- 20) 青柳 聡, 柴崎 誠, 小川克二, 他 : 子宮癌より舌扁桃に転移を来した症例. 日耳鼻 93 : 824, 1990.
- 21) 門脇敬一, 生駒尚秋 : 胃癌による両側口蓋扁桃転移癌の1例. 耳鼻 36 : 1144~1146, 1990.
- 22) 斉藤 聡, 池田健次, 荒瀬康司, 他 : 口蓋扁桃を含む多発転移を認めた肝細胞癌の1例. 肝臓 31 : 871, 1990.
- 23) 三武明夫, 北村 豊, 吉田洋子, 他 : 根治術後1年にて扁桃転移により再発した Borrmann 2型進行胃癌の1例. 日消病会誌 87 : 2556, 1990.
- 24) 森 厚夫, 馬場 恵, 才川義朗, 他 : 化学・内分泌療法に著効をしめした乳癌扁桃転移の1例. 日臨外医会誌 51 増 : 328, 1990.
- 25) 永井裕之, 鈴木 亨, 小塚 誠, 他 : 両側扁桃転移を来した肺癌の1例. 日耳鼻 95 : 766, 1992.
- 26) 坂下勤武, 斉藤 等, 吉田幸夫, 他 : 扁桃への転移性悪性中皮腫. 日耳鼻 95 : 611, 1992.
- 27) Feleppa AE and Ellison NM : Metastatic pancreatic adenocarcinoma of the tonsil. Ear Nose Throat J 60 : 136~138, 1981.
- 28) Maor E, Tovi F and Sacks M : Carcinoma of the pancreas presenting with bilateral tonsillar metastases. Ann Otol Rhinol Laryngol 92 : 192~195, 1983.
- 29) 半田公彦, 河野正己, 新垣 晋, 他 : 下顎骨へ転移した腭癌の1例. 日口外誌 36 : 636~643, 1990.
- 30) 中川 徹, 堀内克啓, 植村和嘉, 他 : 腭尾部からの転移性歯肉腫瘍の1例. 日口外誌 31 : 2825~2829, 1985.
- 31) 谷江勇一, 加藤則廣, 野村正之, 他 : 腭癌から口腔内に転移したと思われる Adenocarcinoma の1例. 岐阜厚生連誌 5 : 78~79, 1984.
- 32) Oku T, Hasegawa M, Watanabe I, et al : Pancreatic cancer with metastasis to the larynx. J Laryngol Otol 94 : 1205~1209, 1980.

原稿受付 : 平成4年9月1日
原稿採択 : 平成4年10月2日
別刷請求先 : 河合晃充
〒701-01 倉敷市松島577
川崎医科大学耳鼻咽喉科学教室